

愛をなくした冷徹御曹司が  
溺愛パパになりました

---

桜 朱理

*Syuri Sakura*



Eternity  
BUNKO

## 目次

愛をなくした冷徹御曹司が

溺愛。パパになりました

書き下ろし番外編

ウエディングブルー

愛をなくした冷徹御曹司が

溺愛。パパになりました

プロローグ 男は過去の真実を知る

凍てつく冬の日差しが緩み、春の兆しきざしが感じられる二月初旬——久しぶりに招かれた祖父の屋敷の廊下を歩いていった間宮千歳は、外から聞こえてきた鳥の鳴き声に足を止めた。

廊下の窓に目を向けると、中庭の綻びほたぎ始めた梅の木に、黄緑色の小鳥が止まっているのに気づく。

梅の蕾つぼみをつつく姿の愛らしさに、目を細めた。春を告げる鳥の姿に、風流を解さぬ男なりに、季節の移ろいを実感する。

——メジロか。

『春に花の蜜を吸いにくる黄緑の小鳥は、メジロよ。目の周りが白いからすぐに見分けられるわ』

かつてあの鳥を鶯うぐいすと勘違いした間宮に、そう教えてくれた女の声が脳裏うらがえに蘇る。途端に、間宮の眉間に皺わが寄った。

あの時も、この中庭で梅の花の蜜を啄ついばむメジロを二人で見つけた。

黒目勝ちの目を細めて、その様子を見て微笑んでいた恋人だった女の笑みが、ありありと瞼まぶたの裏に浮かんで、愛おしさと憎しみが同時に湧き上がる。

——もう昔のことだ。あの女のこととは忘れたはずだ。

間宮は感傷を振り切るように、メジロから視線を引き離した。思い出した過去は、間宮に痛みしか与えない。

その痛みに囚われる前にと、祖父の寝室に向かう足を速める。

ほどなく辿り着いた祖父の寝室の扉をノックする。中からすぐに誰すいかの声があり、「千歳です」と答えると、低く掠れた祖父の声が入室を許可した。

祖父の寝室は、明るい木目調の家具と新緑のファブリックで品よく整い、春の柔らかかな日差しに照らされていた。

居心地の良さそうな寝室に足を踏み入れれば、キングサイズのベッドに横たわる祖父の圭造と、それに付き添う秘書の添島そくしまの姿があった。間宮の姿を認めた圭造が、柔らかな笑みを浮かべる。

——瘦やせせたな。

久しぶりに会う祖父の姿が、記憶にあるよりも小さく見えて、間宮は驚く。

昔はとても大きな人に思えたが、病に倒れた今は年よりも老けて見えて、間宮の胸が

痛んだ。

圭造は地方の小さな製薬会社の二代目社長であったが、戦略的な企業投資で、医療分野の様々な企業を傘下に収め、製薬・医療機器メーカーとしては日本最大手までに育て上げた。

今は社長職を問宮の父に譲り会長職にあるが、七十代後半である今も、精力的に仕事をしてきた。だが、一か月前、心筋梗塞しんきんこうそくを発症して倒れた。幸い処置が速く一命はとりとめたが、今までの無理がたたって医者から自宅での療養を命じられていた。

「いきなり呼び出して悪かったな」

「いえ、大丈夫です。それよりお体の方はどうですか？」

想像以上に弱った祖父の姿に覚えた動揺を悟られたくなくて、問宮はあえて穏やかに微笑んでみせた。

「おかげさまで体はもうすっかり良いんだが、周りがうるさくてな」

苦笑した祖父がちらりとベッド脇に座る添島を見やった。まるで彼が過保護なのだと言わんばかりの眼差しに、添島は気づかぬ振りで眼鏡の蔓づらを持ち上げて位置を直すと、立ち上がった。

「こちらにお座りください。私はお茶の用意をしてまいります。それまで会長のお相手をしてあげてください。退屈でたまらないみたいなので」

雇い主の前だということに不遜ふそんな言葉を放つ添島に、圭造がむっとしたように唇を引き結んだ。

この二人は、雇い主と秘書というよりは、昔からの悪友同士のようなのだ。気の置けないやり取りはいつものこと。ワーカホリックの気がある祖父は、目を離すとすぐに仕事をしようと無茶をする。そのため、大人しく療養させるのに添島がかなり苦勞していることは耳にしていた。

普段と変わらない二人のやり取りに安心して、問宮は苦笑する。

添島は手にしていたタブレットを祖父に渡し、問宮に席を譲るように出口に向かう。すれ違いざま、「ご迷惑をおかけしてます」と囁ささやくと、添島が後は任せたと言うようにポンと問宮の肩を叩いて、部屋を出ていった。昔からもう一人の祖父のように自分を可愛がってくれた添島の背を肩越しに見送る。

彼が部屋を出て行って、問宮はそれまで添島が座っていた椅子に腰かける。

間近で見つめる祖父はやはり記憶にあるよりも小さくなってきている気がした。祖父の老いを実感して、問宮は思わず視線を逸らしたくなる。その時、圭造がふっと笑った。

「そんな顔をするな」

問宮はハッと祖父の顔を見る。圭造は穏やかに笑っていた。

「私は大丈夫だ。そんな簡単に死ぬつもりはない。まだやり残したこともあるしな」

圭造の態度には、老いも死も受け入れている静かな諦念<sup>ていねん</sup>があるように思えて、間宮は返す言葉を見失う。

そんな孫を見て、圭造はにやりと笑った。途端に溢れ出した力強さに、間宮は目を瞠<sup>みは</sup>る。「心残りがあるうちは、死ぬ気はないよ」

いっそ軽やかなその言葉と態度に、間宮は安堵の息を吐く。

「だが、こうして病に倒れると、自分の残り時間を意識せずにはいられない。そんなわけで、今日、お前を呼んだんだ。私にとつての最大級の心残りを片付けるためにな」

そう言つて、圭造は手にしていたタブレットを間宮に差し出してくる。

そこまで言う祖父の心残りが何であるのか気になって、間宮はタブレットを受け取った。

何気なくタブレットに視線を向けた間宮は、驚愕<sup>きょうがく</sup>に目を見開く。

そこには一組の母子の写真が表示されていた。子どもの誕生日なのか。四本のろうそくが立ったケーキの前に、子どもを背後から抱きしめて笑う母親の姿に、間宮の視線が釘付けになる。

——さっきメジロを見て彼女を思い出したのは、何かの暗示だったのだろうか——  
かつて誰よりも愛した人——そして、最悪の形で間宮を裏切り傷つけた女。

その女の幸せそうな笑みから目が離せない。そんな自分に、間宮は己の心が、いまだ

彼女に囚<sup>とら</sup>われていることを知る。

写真の彼女は彼の記憶にあるよりも髪が長くなっていた。髪色も明るくなっている気がする。

黒目勝ちのクリツとした目、細い鼻筋。形のいい唇——その輝くような笑みも変わっていない。鼻梁<sup>びりょう</sup>にきゅつと小皺<sup>こじわ</sup>を寄せて、白い歯を見せて、まるで子どものように顔全体で笑っている姿は、彼の記憶に焼き付いたままだった。

——百合。

六年ぶりにその名を呟くと、心の奥底に封じ込めたはずの愛しさと憎しみが湧き上がつてきそうになる。間宮は百合の笑みから無理やり視線を引き剥<sup>は</sup>がし、一緒に写る子どもへ目を移した。

そうして、再び驚愕<sup>きょうがく</sup>にその目を見開くことになる。あまりの衝撃で頭の中が真っ白になった。

——そんな馬鹿な。

「……あり得ない」

呆然とした眩きが唇から零れて落ちる。

そこには、百合が間宮を裏切った証拠<sup>しんこ</sup>が写っているはずだった。

しかし、百合が輝く笑みで抱きしめている子どもは、間宮に生き写しだったのだ。

カメラが照れくさいのか、はにかむように笑う子どもは男の子だった。少し癖のある黒髪、意志の強そうな切れ長の目、通った鼻筋、薄めの唇。子どもながらに端正な顔をした男の子は、まるで間宮の子どもの頃を見ているようだった。

『残念ですが、間宮さんは無精子症です。人工授精ですらお子さんを望むのは難しいでしょう』

昔、診察を担当した医師の声が脳裏を過った。

『……妊娠したの。千歳の子だよ……』

同時に、泣きそうだった百合の心細げな声も思い出す。いつも明るく勝気な彼女の弱々しく絶えるような声。あんな声を聞いたのは後にも先にも、あの時だけだった。

——そんな彼女に、俺は何をした？

視界がぐにやりと歪んだ。自分が信じていたものが根底から崩れていく感覚に、間宮は瞼を閉じる。しかし、眩暈は収まらない。

閉じた瞼の裏に、子どもと笑う彼女の笑みが鮮明に浮かび上がる。そして、自分にそっくりな子どもの顔も——

——百合……！

一度、瞼に力を込めて、間宮は目を開く。けれど、目の前の現実は何も変わらなかった。笑う子どもの顔は間宮にそっくりで、彼が犯したであろう過ちを突きつけてくる。

動揺して彷徨う視線が、こちらを見つめる静かな表情の圭造を捉えて、間宮は我に返る。何もかもを見透かすような圭造の瞳に、間宮は口を開きかける。だが、何を言えはいのかわからず、戦慄く唇を閉じた。

動揺も露わな孫の様子をどう思っているのか、圭造は感情を窺わせない表情で、枕もとにあったA4サイズの茶封筒を手に取り、間宮に差し出す。

無言で中を見るように促す祖父に従って、間宮は茶封筒の中身を取り出した。

中に入っていたのは、百合の子と間宮のDNA鑑定の結果だった。

『DNAの親子鑑定の結果…親子関係 肯定』

百合の子どもが間宮の子どもであることが証明されていた。

その結果に、間宮の眩暈がひどくなる。間宮の手の中で、鑑定結果の書類がぐしゃりと音を立てて潰れた。

——何故あの時、俺は百合の言葉を信じなかった？ 何故……

彼女が嘘をついて、男を手玉にとるような女性ではないと知っていたはずなのに——百合は間宮が初めて愛した女性だった。一生傍にいてほしいと願い、同時に、彼女の幸せを願うのなら、子どもを作れない自分は身を引くべきかもしれないと葛藤していた。自分から別れを切り出す勇気がなくて、わざと女性の影を匂わせて、彼女に憎まれるように画策までした。ただ、彼女に幸せになってほしかった。

なのに、百合から妊娠を告げられた時、それまでの自分の行為を棚に上げて、裏切られたショックに強い怒りを覚えた。百合が自分を騙そうとしたことにひどく傷つき、彼女の言葉を嘘だと決めつけたうえ、激しい非難を浴びせて自分の人生から締め出した。

六年前に自分が犯した過ちを突きつけられて、問宮の混乱に拍車がかかる。

「お前にとって、何があり得ないことなのか、二人の間に何があつたのかも知らない。男と女のことだ、どうにもならないこともあるだろう。だが、問宮の血を引く子どもが、認知もされずに育つのを、これ以上は放置出来ない」

祖父の静かな言葉に、問宮の胸に鋭い痛みが走る。

「百合さんは今、北海道にいる。そこで、一人で子どもを育てながらレストランをしている。私が援助して始めたことだ。いつかお前が自分の過ちに気づいてくれることを願っていたが、それを待つ時間が私にはないかもしれないと今回のことで実感した。だから千歳」

一段低くなった祖父の声に、問宮の背筋が自然と伸びた。

「百合さんに会いに行つてこい。そして、今後をどうするのか、彼女と話し合つてほしい。お前自身がきちんと二人のことにけじめをつける。そうでなければ、私はお前を、安心して後継者に指名することは出来ない」

祖父の重い言葉に、問宮は膝の上で拳を握つた。

押し潰されそうな罪悪感や絶望、希望と喜び、そこに湧く疑問が、問宮の胸の中で混じり合い、言葉に表せない感情が嵐のように問宮を襲う。

混乱はある。だが、それに拘こわっている時間が惜しかった。

先ほど見た百合と子どもの笑顔を思い出せば、彼はもうすでに多くの時間を失つていくことを自覚せずにはいられない。

——大事なのはこれから俺がどうするかだ。

自分の犯した過ちの大きさを考えると、百合が自分を許してくれるとは思えない。

それだけのことをした。けれど同時に、彼女がいまだに一人で子どもを育てているという祖父の言葉に、希望を持ちたくなくなる。

身勝手な願いなのはわかっている。

——それでも、俺は……

許されるのなら、もう一度、百合と子どもとともに人生を歩みたかった。

償いたいと思った。この先の自分の人生をすべてかけても、二人に償いをしたかった。望む未来を手に入れる道のりは、険しいものになるだろう。

握つた拳に力が入る。黙って問宮の様子を見守る祖父と視線を合わせて、問宮の覚悟が決まる。

「……わかりました。彼女に、百合に会ってきます。子どものことも、きちんと責任を

果たします」

間宮の答えに、圭造が安堵したように笑った――

第1章 雪解けは、遙かに遠く……

『……千歳、どうして……』

妊娠を告げるために訪れた婚約者の部屋の中――ソファの上で乱れた服装で抱き合う彼と美しい秘書の姿に、シヨックで呆然と部屋の入り口に立ち尽くす。

あの日見た最悪の光景に、益村百合は、これが夢だと自覚していた。

これ以上は見たくない。悪い夢なのだから早く目を覚ませと思うのに、それは叶わぬらしい。どんなに願っても、二人の姿は消えてくれない。

過去の想いと今の考えが混じり合って、悪夢は進んでいく――

百合を前にしても、二人が悪びれることはなかった。ソファの上で、秘書だと言っていた女性は、半裸のまま婚約者にしな垂れかかり、シヨックを受ける百合に勝ち誇った笑みを見せていた。

『何だ。もう君が来る時間だったのか。夢中になりすぎたな』

今まで見たこともない悪辣な顔で笑う男は、まるで見知らぬ人間のように見えた。

けれどそれは、百合が知らなかっただけで、婚約者の本性だったのだろう。

あの頃、結婚を目前にした婚約者が急に自分と距離をとり始めたことに、百合は気づかない振りをした。

結婚の準備を始めた途端に、間宮の態度は明らかに変わった。

いつの頃からか、二人でいても会話が減り、沈黙だけがあった。話しかけても上の空のことが多く、百合に顔を向けてもくれない。二人でいるのに、まるで壁に向かって話しかけているような孤独を感じていた。

進まない結婚準備、すっぱかされる約束、急に通じなくなる電話――そこに見え隠れするものが確かにあったのに、百合はきつと気のせいだと目を逸らし続けた。

結婚を前にナーバスになっているだけ。これはマリッジブルーの一種だと思いつつもとした。あからさまなサインがそこら中にあつたというのに――

待ち合わせに遅れてきた彼から香る甘い女物の香水の匂い。ワイシャツについた口紅の痕。彼の部屋に残された百合の知らない開封したばかりの化粧品。

それらから目を背けたのは、まだ彼を信じ、愛していたから。

今ならきつとそんなことはしない。女の影に気づいた時点で、自分からさつさとあんな最低な男は捨てている。

特にこんな場面に遭遇したのであれば、その辺のものを投げつけて踵かかとを返している。それでもあの時は、愚かにもまだ信じていたのだ。妊娠を告げれば、婚約者が正気に返ってくれるのではないかと――

だけど、現実はそのなにごとに甘くない。御伽噺おとぎばなしのように、彼女の一言で、王子様にかかられた悪い魔法が解けることなんてなかった。御伽噺おとぎばなしは、御伽噺だからこそ、子どもにもわかりやすい幸せな結末が用意されているのだ。現実は、ただ彼女に男を見る目がなかっただけ。

ショックで震えながら、それでも百合は、勇気を振り絞って婚約者に告げた。

『……妊娠したの。千歳の子だよ……』

百合の言葉を聞いた途端、婚約者の顔から表情がなくなった。まるで時が凍り付いたような沈黙が、三人の間に落ちた。

『……ふははは……！』

束の間の沈黙の後、男は狂ったように笑い声を上げた。

『子ども！ 子どもが出来た！』

何がそんなにおかしいのか、男の狂気じみた笑い声に、その場にいた女二人は、気圧されたように身を引いた。

いつまで続くのかと思つた男の笑いは、不意にやんだ。顔を上げた男は、嘲あざわらりを隠す

こともなく唇を歪めると、『それはおめでどう！ だけど、その子の父親が俺だという嘘なら聞きたくないな』と言いつつ放つた。

『千歳……？』

彼が何を言っているのか理解出来なくて、百合は戸惑つた。

『そう言えば、慰謝料の額が跳ね上がるとでも思つたのか？ 他の男の子を俺の子だと言えば妻の座を確保出来るとでも？』

吐き捨てるような口調に、百合は激しいショックを受けた。

『何……言ってるの？ この子は！』

『いつから計画していたのか知らないが、世の中はそんなにうまくいくわけがない。君もその辺にいる財産狙いのただの女だと知れてよかったよ。悪いが婚約も結婚も白紙にさせてもらおう。嘘つきと生涯をともにするつもりも、寄生されるつもりもない』

『千歳！』

『帰ってくれ。君が本当に妊娠していたとして、子どものことは、子どもの本当の父親と話し合うべきだ。俺には関係ない』

そう言ってソファから立ち上がった男は、百合の腕を乱暴に掴んだ。そのまま大股で歩く男に引きずられるようにして廊下を歩いた百合は、玄関の外に押し出された。

まるで汚いものを投げ捨てるような男の態度に、百合は何も言うことが出来なかった。

## ☆

ぱちりと場面が切り替わるように、唐突に目が覚めた。

「最悪……」

あまりの寢覚めの悪さに、思わず掠れた眩きが漏れる。百合は見慣れた木目調の天井を睨みつけて、ため息をついた。

今何時だろうと視線を巡らせて寝室の掛け時計を見ると、七時半を過ぎたところだった。

——何で今頃、あの時の夢なんか見るのよ。

「体調が悪かったにしても、最悪すぎるでしょ」

そう呟いて、百合は体を起こす。ここ五日ほどインフルエンザに罹って高熱を出していた体は、それだけの動きにも倦怠感を訴える。それでも、高熱による関節の不快な軋みも全身の辛さも、かなり楽になっていた。

喉が渴いでいた百合は、ベッドサイドに置いておいたスポーツドリンクのペットボトルを手に取り、半分ほど残っていた中身を一気に飲み干す。

室温に温んでいたスポーツドリンクが、乾いた体に染み渡っていくのがわかる。

水分を取って一息ついた百合は、頭を左右に振る。

——やめやめ！ あれはもう過去の話！ 考えてもどうにもならない！

そう自分に言い聞かせて、夢のことは忘れることにした。

余計なことまで思い出す前にと、百合は枕もとに置いていた体温計に手を伸ばす。脇に挟んで一分。計測終了の電子音で体温を確認すると、三十六度六分だった。

——よかった。下がった。

平熱に戻っていることに安堵する。昨日の朝は三十九度近くまで発熱していたのだ。

あの夢はきつとのそのせいで見たのだろう。

——体調が悪い時の夢は、ろくでもない。

そう思いながら、百合はベッドから下りた。寝汗でパジャマが肌に貼り付くのが気持ち悪くて、シャワーを浴びたかった。筆筒から着替えを出して、寝室を出る。

二月中旬の北海道は、まだまだ冬將軍の支配下に置かれている。暖房がついていた寝室とは違い、廊下は身震いするほどに寒く、百合は肩をすぼめて浴室に向かう足を速めた。脱衣所を兼ねた洗面所の暖房のスイッチを入れて、先にシャワーの湯を流し浴室内を温める。浴室が温まるのを待ちながらパジャマを脱いで、洗濯機の中に放り込んだ。

少し熱めに設定したシャワーで、さつき見た悪夢ごと肌の不快感を洗い流す。

本当は湯に浸かりたいところだが、そこまでの体力はまだ回復していない。

疲れすぎない程度に髪と体を洗ってさっぱりすると、浴室を出る。準備していた着替えを身につけて、居間に向かった。

カーテンを開ければ、窓の外は一面雪景色。雪解けはまだ遠く感じられる。けれど、居間に差し込んできた日差しは、緩んだ柔らかさを孕んでいて、確実に春が近づいていると感じた。

駐車場に停めている愛車に、結構な高さまで雪が降り積もっているのが見えて、百合は天を仰ぎたくなる。

——ああー雪かきしないと。庭と店の前と駐車場……

除雪しなければならぬ場所を数え上げて、がっくりと肩を落とす。

この地方は、二月であってもまだまだ雪が降る。寝込んでいる間も雪は降っていた。

厄介なことにこの時期の雪は、水分を含んで重い。ただでさえきつい作業が、さらに大変になる。

契約している排雪業者に後で電話しなければと考えて、あまり積もってないといいなと願う。だが、窓から見える景色に、その願いはむなしのものになりそうだった。

見ているだけで寒くなる景色に、百合は暖房の設定温度を上げた。

熱い珈琲が飲みたくなって、百合はキッチンカウンターに歩み寄る。そこにあるコーヒーマーカーに豆をセットして、珈琲を淹れる。

珈琲が落ちるのを待つ間、カウンターの椅子に座って何とはなしに部屋の中に視線を巡らせる。

一人きりの部屋の中は、それだけでやけに静かに広く感じた。部屋に響くのはコーヒーマーカーが立てる音のみ。

こんな風に一人きりになるのは一体いつ以来だろうと百合は思う。

去年の夏までは3LDKのこの家で、百合の息子と、小説家の親友、その娘の四人で共同生活をしていた。いつも家の中には人の気配があつて、子どもたちの笑い声が響いていたのだ。

でも、今は百合一人。病後で回復したばかりでは、寂しくなるのも仕方ないのかもしれない。

珈琲が落ちきった合図の音がして、百合は物思いから立ち返る。椅子から立ち上がってキッチンに入ると、お気に入りのマグカップをお湯で温めてから、たつぷりと珈琲を注いだ。

再びカウンターの椅子に座って、マグカップを両手で包むように持つ。冷えていた指先がじんわりと温まってきた。

香ばしい珈琲の薫りが、鼻先をくすぐる。湯気を立てる珈琲に息を吹きかけて一口飲む。胃の中に熱い液体が滑り落ちていくのがわかった。

ホッと息を吐きだして、久しぶりの珈琲コーヒーの味と香りを堪能する。

——やっぱり静かだな。万葉マンナは今頃何をしているかな？

ここにいない息子のことを考える。

——まあ、恵理子エリコのところに預けてあるから心配ないか。

百合がインフルエンザで倒れてすぐに、息子は去年まで一緒に暮らしていた親友の園村恵理子恵りこの家に預けた。まめな恵理子は電話やSNSを通じて、万葉の様子を逐一いちいち伝えてくれた。

それでも、万葉が生まれてから、こんなに長い間離れていたのは初めてだと気づくと、寂しくてたまらなくなる。

——熱も下がったし、夜には迎えに行けるかな。インフルエンザは解熱後二日経てば、人に移す可能性がないんだっけ？

息子のことを考えていたせいというわけではないが、ふと息子によく似た男のことを思い出してしまって、百合は顔を顰しかめた。

せっかく飲んでいた珈琲コーヒーの味すらままずく感じて、百合はため息をつく。

——ここ最近、思い出すこともなかったのに……

きつと今朝見た悪夢の影響だろう。

六年前——百合は妊娠がわかったと同時に、結婚目前の婚約者にお腹の子どもごと捨

てられた。

原因は彼の心変わりだったが、今となつては、あれは本当に心変わりだったのかと疑問に思う。

ただ、百合が気づいていなかっただけで、婚約者の間宮と浮気相手だった秘書は、長年の愛人関係にあったに違いない。そう考えれば、納得出来ることがいくつもあった。

間宮とただの友人だった頃から、秘書の女性は時々百合に嫌味や、嫌がらせめいた行動をしていたのだ。

彼女にしてみれば、後から現れて間宮との関係に割り込んだのは、百合の方だったのだろう。

彼の秘書の高崎玲子たかきれいこは、華のある美しい女性だった。確か間宮より二つ年上だったはずだ。

胸元まで伸ばした豊かな黒髪と、ハーフのようなくっきりとした目鼻立ちに、ぼつとりとした赤い唇。スタイルも抜群によかった。

もともとは間宮の父親の親友の娘で、彼とは幼馴染幼なじみの関係にあったらしい。

何故、彼女と付き合っていないながら、間宮が百合と結婚しようとしたのかは、今もって謎だ。

肉食系の美女に飽きて、正反対の百合によそ見をしたくなったのかもしれない。

玲子に比べれば、百合は平凡極まりない。緩やかな茶色の癖毛の髪、黒目勝ちの目はバンビのようで可愛いと言われたことはあるが、特別な美人かというとなんかそうじゃない。子どもの頃から続けていた水泳のおかげで、スタイルは引き締まっただけで、豊満とは言い難い。

誰が見ても美女である玲子とは、最初から比べるべくもなかったのだ。

最初は物珍しさも手伝って百合と付き合っていたが、結婚の準備が本格的に動き出して、間宮もそのことに気づいたのだろう。

自分が手に入れたものが、いかに平凡でつまらないものなのか——

だから、間宮は玲子のもとへ戻ったのだろう。彼女との関係を隠さなくなり、百合が決定的な場面を見ても、悪びれることもなかった。

百合が妊娠を告げても、間宮の気持ちも百合に戻ってくることはなかった。

むしろ、妊娠した百合の存在自体が面倒になったのか、お腹の子の父親は他の男だと決めつけて、婚約は一方的に破棄された。

間宮ともう一度きちんと話し合いたくて、何度も連絡を取ろうとしたが、そのたびに玲子に邪魔をされた。

一方的な婚約破棄から二か月後、弁護士を通じて、これ以上付きまとうならば、ストーカーとして訴えると言われて、百合はようやく間宮との破局を受け入れた。

百合が諦めたと同時に、婚約破棄の慰謝料が何故か支払われた。平均よりは多額のそれには、きつと口止め料も含まれていたのだろう。

日本有数の企業家一族の御曹司が一般女性を弄もよほんだ挙句、妊娠させて捨てたとは醜聞しゅうぶん以外の何ものでもない。

通帳に振り込まれた、見たこともない金額を前に、あまりに呆気ない恋の終わりを実感して乾いた笑いを漏らしたのを覚えてる。

——あの人と別れて、こっちに越してからの方が、私は人の優しさに恵まれてたよね。再び、珈琲コーヒーに口を付けながらそう思う。

間宮と別れて六年——色々と苦労もあったが、ようやく生活も安定し、百合はこの北の大地で息子と二人、幸せに暮らしている。

婚約破棄当時、間宮との結婚に向け仕事をやめていた百合は、職探しから始めなければならなかった。しかし、妊婦の就活は難航を極めた。

あんな形で自分を捨てた男のお金を使いたくないという変な意地もあって、間宮からの慰謝料には手を付けず、貯金を切り崩して生活していた。

両親には頼れなかった。地元でそれぞれ高校と中学の教師をしていた両親は、その頃すでに兄夫婦と一緒に暮らしていた。世間体を何よりも気にする二人は、妊娠した上に、婚約破棄された娘を受け入れてくれなかった。

実家に帰ってくるならば、子どもは中絶しろと言われて、その時すでに産む決意をしていた百合は、実家を頼るのを潔く諦めた。

今も両親は、未婚で子どもを産んだ娘を許していない。

孤立無援で途方に暮れていた百合に手を差し伸べてくれたのは、父方の伯父だった。独身だった伯父は北海道で、長らく洋食屋を営んでいた。同じ料理人の道に進んだ姪を可愛がってくれていた彼は、百合の窮状を聞きつけて呼び寄せてくれた。

最初は伯父の店を手伝っていたが、万葉が生まれて生活が安定したのを見届けた伯父は、引退を宣言して、店とこの家を百合たち母子に残して、沖繩に旅立っていった。

今では、友人の民宿を手伝いながら、趣味のダイビングを楽しんでいるらしい。時々送られてくる写真葉書には、真つ黒に日焼けした伯父の元氣そうな姿が写っている。

キッチン横の壁に掛けたコルクボードには、万葉や友人たちの写真とともにそんな伯父からの写真葉書が幾枚も貼られていた。

コルクボードに視線を向けた百合は、カメラを向けられることが苦手な息子の困ったような笑みが写る写真に目を止めて、小さく笑う。

万葉は間宮にそっくりだ。彼の祖父が太鼓判を押すほど、間宮の子どもの頃にそっくりらしい。

憎い男の息子——けれど、同時に百合にとっては最愛の子ども。

——あんな男がいなくても、私は万葉と二人で生きていく。

自分に言い聞かせるようにそう思っ、百合はマグカップに残っていた珈琲を飲み切った。

「さて、何から始めようかな」

気持ち切り替えるようにそう呟いて、百合は思い切り体を伸ばす。まるで、その独り言が聞こえていたかのように、玄関のチャイムが鳴る。

——誰？ 宅配は頼んでないはず？

古い作りの家で、カメラ付きのインターホンなどはない。来客の心当たりがなく、百合は首を傾げながら、玄関に向かった。

「はい。どなたですか？」

『園村です』

玄関扉の向こうから聞こえてきたくぐもった男性の声に、百合は目を丸くする。

「え？ 園村さん？」

万葉を預けている親友の夫の来訪に、百合は急いで玄関扉を開けた。

平日の午前中。もうすでに仕事に行っているはずの時間だ。何より、今まで彼が一人でこの家に来ることがなかっただけに、百合は戸惑う。

果たしてそこにいたのは、百合の親友の夫だった。ダウンジャケットにマフラーをぐ

るぐると首に巻き、厚手の手袋に耳当て、膝丈まであるスノーブーツを纏った完全防寒着姿に、百合は目を瞬く。

普段はエリート然としたスーツの似合う美青年のだが、今は防寒着のせいで着ぶくれし、寒暖差で銀縁眼鏡が白く曇っている。

「おはようございます。体調はどうですか？」

「おかげさまで、平熱に下がったわ。それより一体どうしたの？」

見慣れない園村の姿に、百合は呆気にとられながら尋ねる。

「それはよかった。これ恵理子からの差し入れと洗濯ものです」

そう言って、園村が紙袋を二つ差し出してくる。それを受け取りながら、「ありがとう」と礼を言う。中身を確認すれば百合の洗濯物と、保存容器に入れられた惣菜だった。

「これのためにわざわざ来てくれたの？ 園村さん仕事は？」

「これはつい事です。今日は有休を取りました。恵理子に頼まれて、家と店の周りの雪かきの手伝いに来ました。恵理子も子どもたちを保育園に預けたら来ます。雪かきの準備をするのに、俺だけ先に来ました」

「なるほど……」

恵理子が気をきかせて、寝込んでいた百合の代わりに、除雪を頼んでくれたらしい。

さすが我が親友殿。阿吽の呼吸といったところか。百合の懸念事項を先読みして、動

いてくれたのだろう。

—— 本当に私はこの地で、人に恵まれた。

親友の優しさに百合は微笑む。

恵理子とはこの北の大地で出会った。同じ産婦人科に通院し、産み月も一緒の、シングルマザー。

産婦人科が開催するババママ教室で、他の皆は幸せオーラを振りまいて夫婦で参加していたが、百合と恵理子はいつも一人だった。一緒に組んで実習をすることも多く、気づけばよく話をするようになった。

出産も相前後して、病室も同室だったことから意気投合し、去年まで一緒に暮らしていた。

女二人、頼る相手も少ない状況で、肩を寄せ合うように協力し合って子どもを育ててきた。

去年、恵理子の元夫である園村が彼女を迎えに来て、二人はめでたく再婚した。今はこの家を出て、近所に家を構えている。

それでも、何かあれば互いに手を貸し合う状況は今も変わらない。

「とりあえず上がって？ 恵理子が来るまで、中で珈琲でもどう？ 寒かったでしょ」

百合は体を引いて、園村を家の中に招く。

「ありがとうございます。では、お邪魔します」

玄関に入ってきた園村の眼鏡が、寒暖差でさらに真っ白になる。視界を遮られた彼が、眼鏡を外し、マフラーの端を使って眼鏡の曇りを拭いている。

眼鏡を外した園村の顔は、とても整っていた。薄茶色の髪に、左右対称の配置を見せる顔は、見る者の印象によっては冷たく見えるかもしれない。だが、彼の性格がほがらかで優しいことを、百合は知っている。

「はいはい。どうぞ。今、珈琲を淹れるから座って待ってて」

園村のために珈琲の準備をする。園村はダウンなどを脱ぐと、百合に勧められるまま、先ほど彼女が座っていたカウンターの隣の席に座った。珈琲が落ちるのを待つ間、園村が持つて来てくれた惣菜を冷蔵庫に片付ける。一食ごとに小分けにされた野菜スープなどの惣菜は、食欲がなくても食べられそうなものばかりで、恵理子の気遣いを感じた。

「体調はもう大丈夫なんですか?」

冷蔵庫の扉を閉めたタイミングで園村から声をかけられ、百合は振り向く。

生真面目な顔をして、百合の体調を観察するように見つめる園村に、ふっと目元を和らげる。

「もしかして、気にしてた? ご覧の通り体調はもう元通りですよ。熱も完全に下がったし、今日の夕方には万葉を迎えに行くつもり」

「そう。ならよかった」

ホツとする園村に、百合は珈琲が落ちたことを確認して、カップに注いで彼に渡す。

「気にしすぎですよ。別に園村さんが、故意にインフルエンザを持ってきたわけじゃないでしょ」

二月の節分に恵理子たち一家と、この家で節分パーティーをした。

そこに丁度、東京に出張に行ったばかりの園村が、インフルエンザを持ち込んだようだった。

パーティーの翌日に園村が発症し、次いで恵理子が発症した。

子どもたちに移らないようにと恵理子の子どもを百合が預かったが、二人が回復したと同時に子どもたちが発症し、最後の最後に百合がもらってしまった。

幸い子どもたちや園村夫妻はワクチン接種のおかげで、症状はひどくならず済んだが、同じようにワクチン接種を受けた百合だけが、何故か一番症状が重かった。

「いや、俺がもっと気をつけていればよかったなって思っただけです。お店も休ませてしまったし」

「大丈夫ですよ。万葉を預かってもらったし、こういう時はお互い様です。それよりも万葉はどうしてます? いい子にしますか?」

「それこそ心配ないですよ。俺なんかよりも、余程うちの女性陣に馴染んで、お手伝いも率先してやってくれています。重も万葉君とずっと一緒にいられると喜んでいて……」

愛娘まなむすめの態度に思うところがあるのか、唇を尖らせながら珈琲コーヒーに口を付ける様子に、百合はクスリと小さく笑いを漏らす。

「うちの息子は、彼氏としても婿むことしてもお買い得だと思えますよ？」  
 椰揄からかうような百合の口調に、園村がため息を吐く。

「わかってます。わかっているんです！ 万葉君はいい子です。本当にとても……」  
 カップをカウンターに置いた園村は、複雑すぎる父親心を覗かせる。

「去年、自分に娘がいることを知って、やっと一緒に暮らせるようになって、なのに、その娘には立派すぎる彼氏がいたこの気持ちが変わりますか！」

五歳の子どもに嫉妬する園村がおかしすぎて、百合は我慢出来ずに声を立てて笑う。

「百合さん！ 笑い事じゃないんですよ！」

「……いや、だって……ごめん！ 笑い事じゃないってわかるんだけど……！」

笑いすぎて、目尻めじりに滲にじんだ涙を指先で拭う。

「はあ、おかしかった。まあ、董ちゃんと万葉は生まれた時から一緒だからね。そこは諦めて？」

笑いやんだ百合の言葉に、自分の態度が大人げなかったと自覚している園村は、「わかってます」と眩くらいて、すっかり冷めた珈琲コーヒーに口を付ける。

「ところで、園村さん」

百合は話題を変えるために、園村に呼びかける。眼差しだけで答える男に、「雪かきしてくれるって言ってたけど、園村さん大丈夫？」と尋ねる。その途端、園村がうっと詰まった。

東京生まれ、東京育ちの彼は、去年恵理子と再婚して北海道に移住した。

今年の冬は慣れない雪道や除雪に、大変苦労していたことを知っている。滑らないで上手に歩けるようになったのは、最近だ。そんな彼にこの時期の除雪を任せていいのかと、口に出したら不安になってきた。

「恵理子の足手まといにならないように、頑張ります」

自信なさそうな園村に、百合はますます心配になる。

「無理しなくてもいいですよ？ 体調も落ち着いたし、明日になったらもうちょっと動けると思うから、自分でやりますよ」

「いや、今回のことは俺の責任が大きいので、やらせてください」

生真面目に頭を下げる園村に、百合は苦笑する。

「わかりました。それじゃあ、お願いします。正直、助かります。ただ、腰を痛めない程度に、頑張ってくださいね」

「はい」

園村の返事のすぐ後に、玄関のチャイムが鳴った。

「あ、恵理子がもう来てくれたのかな？」

そう言いながら、百合はキッチンを出て、玄関に向かった。

「恵理子ー？ 今、開けるね」

てっきり親友と思い込んで、百合は不用心にも訪問者を確認せずに玄関扉を開けてしまった。

そして、開けてしまったことを後悔する。

外の凍てつく空気が、玄関に雪崩なだれ込んできた。それと同時に、男物のトワレの香りを感じて、百合は硬直する。

匂いは不思議だ。記憶と感情に直結している。だからだろうか。百合はその香りに、真っ先に反応した。かつて、嗅ぎ慣れていたその香りに、まさかと思った。

——何で……

これが悪夢の続きなのか、現実なのか、一瞬わからなくなった。

呆然として、こわごと視線を上に向ける。その先に、息子にそっくりな顔があった。相変わらず男前だとは言いたくない。でも、彼の顔を否定することは、愛息子の顔を否定することに繋がる。

百合は混乱して、ただ目の前の男の顔を見上げていた。

少し癖のある髪を緩やかに後ろに撫でつけている。切れ長の目、通った鼻梁びりょうに、形の

いい薄い唇が、バランス良く配置された顔。

整いすぎて作り物めいて見えるのに、威圧感のある目力が、彼を生きている人間だと実感させる。

背筋を真っ直ぐに伸ばして立つ姿は、年に似合わない落ち着きと威厳のようなものを感じさせた。

どれくらいそうして男の顔を見ていたのかわからない。

一瞬のようにも、永遠のようにも感じられた。

男の——間宮の眉間に皺しわが寄った。その顔は、まるで泣く寸前の息子の表情を思い出させる。

「……百合」

形のいい唇が、自分の名前を呼ぶ。音になった自分の名前が、低く艶つややかな声として、耳に届いた瞬間、百合の呪縛が解けた。

我に返った百合は、咄嗟とつさに玄関扉を閉めようとした。

目の前の悪夢を締め出したかった。なのに、それは動きを察した間宮によって阻はまれる。玄関扉に手をかけ、隙間に足を割り込ませて、扉を閉じさせまいとする。玄関扉が派手な音を立てた。

それでも構わずに、百合は玄関扉を閉じようと全身に力を込めた。しかし、所詮は女

の力だ。いくら抵抗したところで、男の本気の力に敵うものではない。玄関扉は徐々に開かれていく。

「百合！ 話を！ 話を聞いてくれ！」

必死な男の声が、頭上に降ってくる。

「百合さん？ 何か今すごい音したけど、どうしたんですか？」

背後で扉が開く音がして、園村が廊下に顔を出した。

「え？ 百合さん!？」

園村の驚きの声が辺りに響く。その瞬間、何故か問宮の手の力が緩んだ。

それまでの必死さを失ったような態度に、どうしたのかと思つて、百合は問宮の顔を見上げた。

問宮はこちらを見ていなかった。百合を通り越して、部屋の中に射るような眼差しを向けている。

その視線を辿るように、百合は背後を振り返る。そこには問宮と百合の攻防に、どうしたらいいのかわからない様子で、立ち尽くす園村の姿があった。

百合は再び問宮の顔に視線を戻す。眉間にくつきりと寄せられた縦皺と、不機嫌そうに眇めた目。その表情に既視感を覚えた。この不機嫌そうな顔は、かつて百合の周りの男性に向けられていた。

——まさか……私の家に朝から園村さんがいることが、気に喰わないとでも言う気か。そんな権利も資格もないくせに？

まるで今も百合が彼のものであるといった態度に、腹の奥が燃え立つような怒りを覚えた。

それまで全力で掴んでいた玄関扉のドアノブを離す。かろうじて保たれていた均衡が破れ、問宮がバランスを崩した。

雪除けの玄関フードの中で、問宮の長身がよろけたのを、百合は冷めた眼差しで見ている。

「朝から一体何の用でしょうか？」

他人行儀な百合の言葉に、問宮がハツとしたように園村に向けていた視線を百合に戻した。

「百合。君と話し合いたいことがある」

「話？」

——今更何を？ 私が話をしたいと言つた時は、聞き入れなかったくせに？

百合はハツと鼻を鳴らす。

「私にはありません。お引き取りください」

それだけ言つて、扉を閉めようとする。しかし、再び問宮によって、それは阻まれた。

「子どもに！ 息子に会いに来た……父親として責任を果たしたい」

絞り出すような男の言葉に、百合は頭から冷水を浴びせられた気分になった。手から力が抜けて、間宮が扉を大きく開ける。

——子ども？ 息子？ 子どもの父親であることを拒んだくせに？

燃え立つような怒りが急速に冷えて、胸の奥で凝っていく。怒りに比例するように、冷静になる。

「どこのどなたと勘違いして、こんな北海道の田舎まで来たのか知りませんが、ここにあなたの息子なんていません」

聞き間違えないように、嫌味なほど丁寧なゆっくりと、一言一言を口にする。

——六年前のあの時、自分が何と言って、あの子の存在を拒んだか、忘れたとは言わせない。

言葉を発することに、自分の中の怒りが凍てつき、どんどん大きくなっていくのがわかる。

言いたいことが溢れすぎて、言葉が追いつかない。

「それとも、心当たりが多すぎて、わからないのかしら？」

女癖の悪さをあてこする。

「君が怒るのは当然だ。わかっている。でも、俺の話を聞いてほしい。頼む」

誠実そうな顔をして、頭を下げる男に虫唾が走る。百合は自分の身を護るように、胸の前で腕を組むと、艶やかに微笑んで見せた。

その笑みに男の瞳に期待が宿ったが、百合は「お断りします」と間宮の願いをばっさり切り捨てた。

「百合！」

「あなたの話を聞く義理はないわ。帰って」

冷たく拒む百合に、間宮はひどく傷ついた顔をする。

「百合！ 頼むから話を聞いてくれ。万葉の将来について、話したい」

「気安くあの子の名前を呼ばないで！」

間宮の言葉を遮るように叫ぶ。

——どこであの子の名前を知ったの？ おじいさまが教えたの？

頭の中を疑問が駆け巡るが、それよりも今は目の前の男をどうにかする方が先だと、自分に言い聞かせる。

「帰って！ そして、二度と来ないで」

「百合！」

「園村さん！」

間宮が百合に近寄ろうと一歩足を踏み出そうとする。それを牽制するように、百合は

園村の名を呼んだ。

「はい」

それまで、二人のやり取りを黙って見ていた園村が、百合の呼びかけに戸惑いを滲ませた声で返事をする。

「警察を呼んでください。うちに入り込もうとする不審者です！」

問宮を睨みつけたままの百合は、園村にそう頼む。

「えーと、百合さん。いらぬお節介だと思っただけ……」

園村が困惑を滲ませて、何か助言めいたことを言おうとする。その先は、簡単に想像出来た。

「そう思うなら黙っててください。この人に対する助言なら、何も聞きたくありません」  
「事情は色々あると思う。でも、彼ときちんと話し合った方が……」

「本当に余計なお世話です。お願いします。今は何も言わずに、警察を呼んでください」  
懇願を含んだ百合の声音に、園村は沈黙した。

「百合！ 頼むから話を……」

「六年前、話をしたいと言った私に、あなたは何をした？ 一度だって答えてくれなかったでしょ？」

百合の言葉に、問宮が胸を突かれたような顔で言葉を途切れさせる。

——何であなたが傷ついたような顔をするの？

傷ついたのも、痛みを覚えていたのも百合の方だ。

「本当に警察を呼ばれる前に、帰った方がいいわよ」

それまでの感情も露わな声を出していたのが嘘のように、静かな声だった。

問宮はなおも説得を続けようとしたが、百合の冷たい拒絶を前に口を閉ざし、気持ちを落ち着かせるように深く息を吐きだした。

「……わかった。今日は帰る。朝早くいきなり押しかけて悪かった。また来る」

「二度と来ないで」

百合は玄関扉を閉めた。問宮の姿が目の前から消えて、百合は脱力したように、その場に座り込んだ。この数分で、ひどく疲れた。

——何で……何で今頃、やって来るのよ。何しに来たのよ。

胸の中に渦巻く感情を処理出来ずに、百合は唇を噛みしめる。

「百合さん、大丈夫ですか？」

静かな園村の声に、百合は俯いていた顔を上げる。心配そうにこちらを見る園村に、笑みの形に唇を引き上げる。なのにそれはぎこちない、笑みとは言えない無様な顔だった。

「さっきはごめんささい」

つい感情的になって、園村に声を荒らげてしまったことを詫げる。

「いや、あれは俺が悪い。事情も知らないのに、彼の方に感情移入してしまった」  
その言葉に、百合はふっと肩の力を抜く。

「あの人は園村さんとは違います。あなたは董ちゃんが存在を知らなかった。でも、彼  
は私が妊娠したことを知っていて、私を捨てたんですよ。認知すらしなかった」

——そんな男が、今更万葉のことで話があるですって？ 笑わせないでよ。  
心の中で吐き捨てる。

「彼にも何か事情があったのかもしれない」

「……どんな理由があれば、妊娠した婚約者を捨てられるんですか？」

「それはわからない。でも、さっきの彼は、百合さんと話がしたいと切実に思ってるよ  
うに見えるよ」

確かに見たこともないほど、必死な様子ではあった。だからといって、百合がそれ  
を受け入れるかは、別の問題だ。

子どもっぽい理屈だとわかっているが、六年前に百合の訴えを切り捨てた男の話を、  
何故自分が聞かなければならないのかといった思いが、胸の底を焦がしている。

「とりあえず、立った方がいい。病み上がりになんかところに座っていたら、体を冷や  
してしまふ」

園村の言う通りだ。玄関の床に直に座り込んでいるせいで、足元から寒気が這い上がっ

てくる。

百合は園村の差し出してくれた手を掴んで立ち上がった。

そのタイミングでチャイムが鳴り、百合はびくりと震える。

一瞬、間宮が戻ってきたのかと思った。だがすぐに、「百合ちゃん？ 私。恵理子だよ」  
と親友の声が聞こえてきて、百合は強張っていた表情を緩めると玄関扉を開けた。

園村同様に完全防寒着姿の恵理子が立っていた。

「百合ちゃん、大丈夫？ 顔が真っ青になってる」

「うん。何でもないんだけど……ちょっと」

「うん、知ってる。見てた。実はちょっと前から来てただけど、揉めてるみたいだっ  
たから、何かあったらすぐに警察を呼べるように待機してた」

そう言っ、握りしめていたスマートフォンを見せる恵理子に、百合はくすりと笑う。  
笑えたことにホッとした。

「あの人が、通りに出てタクシーを拾うのまで確認してきたから、安心して？ とりあ  
えず、中に入ろう？ こんなところにいたら体が冷えちゃう」

夫婦揃って同じことを言う。「ほらほら。中に入ろう？」と促してくる恵理子に急ぎ  
立てられるように、三人とも居間に戻る。恵理子がダウンコートを脱いで、マフラーを  
外した。

背の半ばまである長い髪を、今日はシニオンにしていた。華奢で小柄な体。日本人にしては色素が薄く、天然の栗色の髪と瞳をした美しい顔は、黙っていれば人形めいた冷たい美しさと儂さを持っている。だが、その見た目とは裏腹に、恵理子の全身はエネルギーに溢れ、その顔にはいつも生き生きとした表情が浮かんでいる。

「百合ちゃん。朝ごはんは？ 食べた？」

振り返った恵理子の問いに、百合はそういえばと首を横に振る。

「まだ……珈琲は飲んだけど……」

「だからか！ 百合ちゃん、朝ごはん食べないと途端に元気なくなるよね！」

納得顔で頷いた恵理子が、軽やかな足音を立てて百合のもとにやって来る。

下から覗き込むように顔を見上げた恵理子は、そつと百合の頬に両手を添えた。そのまま引き寄せられて、額がこつりと合わさった。

「熱は下がったみたいだね」

「……うん」

「だったら、その顔色の悪さはやっぱり朝ごはんを抜いたせいね！ ごはん食べたらきつと元気になるよ！」

吐息の触れる距離でにこりと微笑んだ恵理子が、身を翻してキッチンに入ってしまった。

「百合ちゃん、冷蔵庫、開けてもいいいー？」

「いいよ」

「じゃあ、百合ちゃんは、そこに座って待ってて！ 超特急で美味しい朝ごはんを作るから！ 誠さんもそんなところに立ってないで、座ってて」

恵理子のおかげで、一気に家の中が明るくなる。くるくると表情を変える彼女の姿は見ているだけで飽きない。そんな恵理子を慈しむような眼差しで見つめていた園村と目が合って、百合は軽く肩を竦めてみせた。

ここは大人しく恵理子の言う通りにした方がいいだろうと、視線だけで会話する。

百合は恵理子の言葉に従って、先ほどまで座っていたカウンターの席に座った。園村は寒かったのか、ストーブの傍のソファに腰かける。

百合はカウンターからキッチンで作業する恵理子の様子を見守っていた。

恵理子は勝手知ったる様子で小鍋を用意すると、冷蔵庫の中から自分の差し入れたオニオンスープを取り出して、小鍋で温め始めた。次にフランスパンを適当な大きさに切り分ける。それをココットに入れ、上から温めたオニオンスープを注いで、とろけるチーズをのせた。

それをオーブントースターに入れる。家の中にチーズの蕩ける匂いと玉ねぎの甘い匂いが広がり始める。食欲をそそるその匂いに、百合は恵理子の言う通り自分が空腹だったことを知る。

「いい匂い」

「もうちょっと待っててね」

にこりと笑う恵理子に、百合の表情も自然と緩む。いつもこの明るさに助けられている。「はい。お待たせしました。熱いから気をつけて……」

厚手の鍋掴みをした手が、カウンタールにココットを置いてくれる。

「味は百合ちゃん直伝じきでんのオニオンスープグラタンだから、絶対に美味おいしいはずだよ？」

「ふふふ……それは楽しみ」

スプーンを渡されて、百合はオニオンスープグラタンを口に入れた。舌が火傷やけどしそうなほどに熱い。よく炒められた玉ねぎの甘みと、蕩けたチーズの塩味が口の中で溶け合っ  
て、優しい味が口の中に広がった。胃の奥から温められた血潮がゆつくりと巡り始めて、  
寒さや緊張に強張こわばっていた体から力が抜けた。

「美味おいしい……」

「それはよかった」

「腕を上げたね」

「百合ちゃんの指導のたまものだね！」

百合の褒め言葉に、キツチンにいた恵理子は照れくさそうにはにかんだ。

一口食べれば、止まらなくなった。あつという間に、恵理子が用意してくれたオニオ

ンスープグラタンを食べきってしまった。

「ごちそうさま」

「お粗末さまでした。顔色も良くなったね。やっぱり朝ごはんはちゃんと食べないと駄目ね」

血色の良くなった百合を見た恵理子の表情は安心したように、ぐっと優しく柔らかなものになる。

「さ、ごはんも食べたし、百合ちゃんはもうちょっと寝て方がいいよ。その間に、私たちは家の前とお店の周りの雪かきをしておくから」

恵理子の言葉に、百合はさっきの不安を思い出す。

「大丈夫なの？ 園村さんにこの時期の雪かきを頼んで」

「大丈夫よ。ていうか、大丈夫にする！ 誠さんも最近は除雪に慣れてきたし、これからも北海道で生きていくって言うなら、頑張ってもらおうしかないわ。ねえ、誠さん？」

「そうだな。君の足を引っ張らないように頑張るよ」

声をかけられて、園村がゆつたりと肩を竦すくめてみせた。

「誠さんもこう言ってるから安心して。百合ちゃんはこっちは気にしなくて、今はゆつくりと休んで体を回復させることを一番に考えよ？」

「でも……これ以上、迷惑をかけるわけには……それに熱は下がったから動けるし、自

分でやるよ?」

「何言ってるの? こういう病気は治りかけが肝心だよ? それに私たちがインフルエ  
ンザで倒れた時は、百合ちゃんも面倒を見てくれたじゃない。こういう時は、お互いさま」  
今までそうやって助け合ってきたでしょう? と、恵理子の眼差しに込められた言葉  
にしない想いを感じ取って、百合の胸の奥が温かいもので満たされる。

「ありがとう」

「礼を言われることじゃないわ。さ、百合ちゃんはベッドに行って休んで!」

恵理子が背を押されるようにして、寝室に戻る。そうして、子どものように布団の中  
に寝かしつけられた。

いつもは見下ろすことの多い恵理子をベッドの中から見上げるのは、不思議な気分  
だった。

「何か子どもに戻った気分」

「たまにはいいんじゃない? 百合ちゃんはいつも頑張りすぎだもの。たまにこうして  
お世話出来て、私は楽しいよ?」

百合が負担に思わないように、にっと笑ってそう言った親友に、百合の体から自然と  
力が抜けた。

——さっきあんなことがあったのに、恵理子は何も聞かないな……

## 立ち読みサンプル はここまで

優しく微笑む親友の顔を見上げるが、その顔からは百合に対するいたわりの想いしか  
読み取れない。

今、きつと問宮のことを一言でも口にされたら、百合の張っていた虚勢は崩れ落ちる。  
それがわかっているから、言いたいことも、聞きたいこともあるだろうに、あえて何  
も言わずにいてくれる親友の気遣いが身に染みた。

「お昼に一回様子見にくるから、それまではゆっくり寝てたらいいよ」

「うん」

「おやすみ」

恵理子が寝室を出ていった。一人になって横になると、どっと疲労が押し寄せてきて  
眠くなる。あの短時間で、余程自分は気力を使い果たしてしまったのだろう。

考えなければならぬことは、たくさんある。なのに、まぶた眼が重くて言うことをさかない。  
閉じたまぶた眼の裏に問宮の姿がくつきりと浮かぶ。その姿は六年前に別れた時の姿ではな  
く、今朝見た問宮の姿だった。

——何で……今頃……

二度と会うことはないと思っていた男との邂逅に、百合の心は激しく掻き乱され  
た——